

派遣者番号	管 31K09	氏 名	辻村 洋平
研究主題 —副主題—	卒業後を見越した都立特別支援学校就業技術科における学習の充実 —キャリアガイダンスの実践をとおして—		
派遣先	帝京大学 教職大学院	担当教官	神田 基史
所属	都立青峰学園	所属長	豊田 栄治

キーワード：就業技術科 生涯学習 キャリアガイダンス

## 1 研究の背景(目的)・主題設定の理由等

文部科学省「障害者の生涯学習の推進方策について—誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して—(報告)」(平成31年3月)によれば、「学校教育から卒業後における学びへの接続を円滑化するとともに、卒業後の学びの機会の充実を図る必要がある。特別支援教育を行う学校においては、障害のある生徒が自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加するために必要な力を培うため、障害の重度・重複化、多様化への対応、一人一人に応じた指導の充実、自立と社会参加に向けた職業教育やキャリア教育の充実が図られている。」とある。

A特別支援学校は開校して11年を迎え、これまでに334名の卒業生を輩出してきた。平成31年度のA特別支援学校進路指導部の調査によれば、卒業後の定着率が87.5%あることから、在学中の学びの充実が職場への適応や働く生活の礎につながっていることと想定する。

先行研究として、定岡(2017)は「知的障害のある生徒については、学習面や生活面において様々な経験や成功体験を身に付けさせる必要がある。このような学びを重ねていく過程で、人を思いやる気持ちや触法行為を行わない規範意識、公私の区別や節度ある人間関係を形成できる力、学び続けようとする向上心、道徳観や倫理観の育成を図らなければならない。」と挙げている。また、原(2007)は「卒業後の居住場所の違いにより、自宅群では、『コミュニケーション』と『就労意欲』が課題としてあがり、自宅外群では、『生活上の問題』が多くあがった。このように、卒業時の課題に差がみられたことは、自宅外に住む企業就職者にとって、学校卒業時に『生活上の問題』が重要な課題であることが推察された。」と挙げている。

この職場定着や移行期における課題を解決するため、知的障害特別支援学校高等部段階におけるライ

フキャリアの観点をもった学習の充実とそれを支える各教科との連携、すなわちカリキュラム・マネジメントが求められているものとする。そこで、本研究は卒業後を見越した学習とライフキャリアの観点の学習の充実を目指し、学習の核となる都立特別支援学校就業技術科におけるキャリアガイダンスの時間の指導の現状と課題を調査・分析し、授業改善のための実践を通じて年間指導計画・シラバスの試案作成を行うこととした。

### 【研究1】

都立特別支援学校就業技術科におけるキャリアガイダンスの時間の学習内容を調査・分析をする。

### 【研究2】

- ①研究1の結果を基にキャリアガイダンスの時間を軸とした教科横断学習について授業実践をする。
- ②研究1、授業実践の結果を基に新学習指導要領と関連したキャリアガイダンスの時間の年間指導計画試案を作成する。

## 2 研究の内容・研究の方法

### 【研究1】

- ①就業技術科5校への訪問・面接調査
- ②面接調査結果の分析
- ③年間指導計画の分析
- ④必要となる学習内容の精査

### 【研究2】

- ①研究1の結果から単元化
- ②キャリアガイダンスの時間を軸とした教科横断的な授業実践
- ③年間指導計画・シラバス試案作成

### 3 研究の結果

#### 【研究1】

面接後、スクリプトを作成し、カテゴリ化して分析をした。分析にあたり概念図（特性要因図）を作成し、キャリアガイダンスの時間における課題と改善点を明らかにした。一例としてA特別支援学校の概念図を示す。

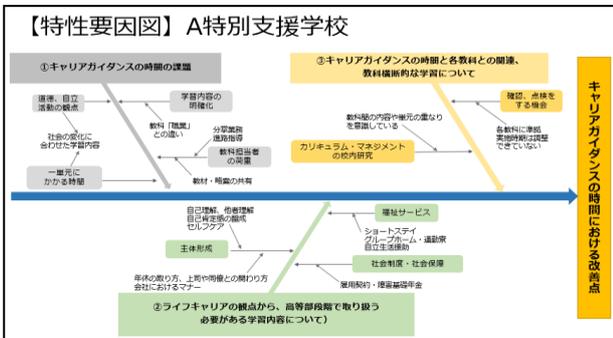


図1 A特別支援学校 特性要因図

#### 【研究2】

研究1を基に高等部就業技術科2年生を対象に、WHO「10のライフスキル」、道徳、自立活動の内容項目を統合させ、キャリアガイダンスの時間を軸とした単元『SNSとわたしたち』を立案した。関連する教科として職業、情報、社会科、家庭科との教科横断的な授業計画、実践をした。

### 4 研究の考察

#### 【研究1】

訪問調査をする事で、就業技術科5校における特色、学校教育目標、地域性などと照らし合わせた教育課程、その教育課程に位置付けられたキャリアガイダンスの時間の学習内容、他教科におけるライフキャリアの観点をもった学習内容について把握した。インタビューと年間指導計画の分析において共通していた課題意識と単元設定として、10のライフスキルにおける「自己認識」が挙げられる。

#### 【研究2】

生徒たちから活発な意見や発言、教材であるインターネット上でSNS（ソーシャルネットワークサービス）を疑似体験できる情報モラル教育教材「とりりん★チャット」（鳥取大学総合メディア基盤センター）への投稿があった。全体の前で発表が苦手な生徒もタブレット型端末を介して発言ができていた。SNSのリスクや相手をおもんばかりの意見を記述できた生徒が34名、リスクや相手をおもんばかりと同時に具体的な方策まで記入できた生徒が11名、その他の意見が9名であった。

教科等横断的な事例としての扱いについて、教科間のつながりを意識できていたと記入した生徒は3名であった。改善策として、関連する教員との定期的な打ち合わせとともに、教科間で共通するツール（ワークシートやファイル）の活用、共通するキーワードの用い方、実施時期の調整などが考えられる。知的障害のある生徒を対象に教科横断的な学習を実施するに当たっては、導入時に他教科での既習内容を確認する、共通する教材・教具を用いるなど具体的な手だてを改善指導案に反映した。また、授業実践の結果を基にキャリアガイダンスの時間の年間指導計画・シラバス試案を作成した。

### 5 今後の展望

本研究は就業技術科の「キャリアガイダンスの時間」という限定的な焦点を当てたが、特別支援学校普通科においては教科「職業」等の中で対応することができると思う。全ての特別支援学校において、ワークキャリアとライフキャリアを包括した教育課程の計画と運営・実施、組織的なカリキュラム・マネジメントが求められているのだとも考える。また結果と考察から、その達成に向けて喫緊に必要なとなると考える三点を以下に示す。

一点目は軸となる担当教員の育成についてである。各教員が道徳と自立活動を合わせた指導形態における観点の理解を深め、他教科における学習内容との関連性、系統性を把握する意識を高めることで、より一層の教科等横断的な学習が活性化され、教科等横断的な学習の核となりうるものとする。

二点目は普通教科における学習の充実である。教科等の横断をより効果的に行うためにも、他教科における学習内容を把握し、関連性、系統性、発展性を意識するなど、普通教科における学習内容の精査と充実を図る必要がある。

最後に、学習内容を確認、点検する機会についてである。各学校における組織だった各教科等の学習計画と教科等横断的な視点をもった全教職員の理解が必要となる。「関わり」を深くて広い学びにするために、無駄な「重なり」をなくして効率的な学びにすることが「カリキュラム・マネジメント」の一つの在り方と考える。今後、この関連性と系統性を明らかにし、企業就職を希望する生徒の学びとして、いつ、どの教科で、何を学ぶのか、生徒・保護者・教員で共有でき、どの学校でも実施できるパッケージとなるよう作成・活用を考えたい。